

海外大学と国内大学の入試形式の違い

「大学入試」と聞いてまず思い浮かべるのは、日本国内の大学の一般入試や共通テストかもしれません。しかし、日本の高校を卒業して海外大学に進学する場合、その意味合いは大きく異なります。この記事では、海外大学の入試形式が日本とはどのように違うのかを紹介します。

■日本の大学入試の特徴

まずは日本の大学入試制度を簡単に整理してみましょう。国内の大学入試では、以下の様な形式が一般的です。

- **大学入学共通テスト（旧センター試験）**：全国一律の試験で、多くの国公立大学や一部私立大学で利用されます。
- **個別試験（二次試験）**：大学ごとに実施される学力試験。
- **総合型選抜（旧 A0 入試）・学校推薦型選抜**：調査書、面接、小論文、志望理由書などをもとに総合的に評価する方式。

いずれにしても、「筆記試験」などによって試験当日の学力を測ることが中心である点が日本の大学入試の大きな特徴です。

■海外大学の入試：試験よりも「書類選考」が主流

一方、海外の大学では、日本のように全国一斉の学力試験が存在することはまれで、各校が定める英語スコアの基準をクリアする必要があるものの、出願書類をもとにした審査（書類選考）が中心です。入学の可否は、主に「これまでの実績と人物像」によって判断されます。

出願時に必要とされる主な書類は以下の通りです：

- **高校の成績（GPA）**：1年生からの成績が評価対象となるため、日々の学習が重要です。
- **英語スコア（TOEFL iBT、IELTS など）**：大学ごとに求められるスコア基準をクリアする必要があります。
- **志望理由書（Personal Statement / Essay）**：なぜその大学・学部で学びたいのかを自身の経験や将来の目標とともに表現します。

- **推薦状**：高校の先生などが記入します。学習姿勢や人物像を証明する重要な資料です。
- **課外活動・社会活動の実績**：クラブ活動、ボランティア、コンテスト受賞歴なども評価対象となります。

■ 国内大学との主な違い

出願に必要な準備の中でも、日本の大学との違いが際立つ点を以下に整理します。

1. 学力試験の位置付けが異なる

- ・日本：**大学入学共通テスト（旧センター試験）**や大学独自の筆記試験など、学力試験中心
- ・海外：筆記試験を課す大学は少数。あくまで提出書類による総合評価が主

2. 高校生活全体の成果が問われる

- ・日本：主に高校3年までの学力が重視される
- ・海外：高校3年までの学校の成績や様々な活動実績が重視される

3. 自己表現の力が問われる

- ・日本：選択問題や模範解答のある問題への対応力が重視されやすい
- ・海外：自分の考えを英語で論理的に伝える力（エッセイ、インタビューなど）が重要

4. 出願時期が早い

- ・日本：入試は主に1～3月
- ・海外：出願は多くが12月～翌1月、早い大学では11月に締切を迎えることもある

■ 「準備力」が未来を切り拓く

このように、海外大学の入試形式では「どれだけ準備できたか」が結果に直結します。早めに出願に向けた情報を集め、自分の得意や興味を棚卸ししながら書類作成を進めることで、チャンスを広げることができます。

また、学力試験で高得点を取る力に加えて、自分を表現し、将来のビジョンを描ける力が求められるのが、海外大学入試の大きな特色です。国内大学との違いを正しく理解し、まずは情報を得ることから始めてみてください。

まとめ

海外大学の入試は、筆記試験を受けた時点の学力評価の結果ではなく、これまでの経験や努力、将来のビジョンをもとにした総合的な人物評価です。長期的な準備と自己理解が成功の鍵となります。

- ・これまでの取組や自分らしさを評価してくれる大学に進学したい
- ・世界で通用する力を身に付けたい

と考える人にとって、海外大学の入試制度は、大学進学の可能性を広げてくれるかもしれません。選択肢の一つとして、海外の大学進学をぜひ視野に入れてみてください。